

<最優秀卒業論文>

役割語の役割とは

～翻訳文に潜むステレオタイプ～

学籍番号 12530076

氏名 多田安衣美

指導教員 小坂橋靖夫先生

目 次

第1章	はじめに	
1-1	動機、目的	199
1-2	構成	199
第2章	役割語	
2-1	概要	200
2-2	ステレオタイプ	201
2-3	男ことば	202
2-4	女ことば	203
第3章	中学英語教材における役割語	
3-1	直訳と意識	205
3-2	中学1年生	205
3-3	中学2年生	209
3-4	中学3年生	211
3-5	学年ごとの差異	214
第4章	文学作品における役割語	
4-1	日本 『はいからさんが通る』	215
4-2	海外 『ハリーポッター』	216
第5章	おわりに	
5-1	今後の役割語	219
5-2	まとめ	220
参考文献		220

第1章 はじめに

1-1 動機、目的

友達同士で会話をするとき、目上の人と会話をするとき、改まった場面でのコミュニケーションなど、人は状況に応じて自分の言葉を自在に操ることができる。このような、話し手が場面や環境、相手に応じて言葉づかいを変えることを、社会言語学では「スタイル・シフト (style shifting)」と呼んでいる。普段の生活で日本語を使っている (日本語を母語にしている) 人は、言葉づかいだけで、その人がどのような人なのかをイメージすることができる。音声からの情報ならば、耳から聞こえてくる声や言葉づかい、音の高低、緩急から、その人がどのような人なのか頭の中でイメージするだろう。文章だけの情報ならば、いっそう言葉づかいが重要になる。頭の中で「きっとこのような人が話しているのだろう」と人物像を創り出していく。このように人それぞれ頭の中にある、言葉づかいから感じられるイメージに興味を持ち、詳しく研究したいと思ったのが、このテーマを卒業論文の題材にしたきっかけである。

大学生活の4年間、個別指導塾で講師としてアルバイトをしていたため、中学生に英語を教える機会が多かったことが、中学英語教材を採り上げた理由である。アルバイト中も、中学生が教科書の英文を日本語に訳す際に、話し手が女性の場合は、語尾を「～なのよ」「～だわ」と訳し、話し手が男性の場合は、人称を「俺」「僕」「僕ら」と訳すことが多く、語尾を「～だ」「～ぞ」と訳していることに気がついた。そこで、もしかしたら英文を日本語に訳す際に、無意識に役割語の機能を使っているのではないだろうかと推測した。人はいつ、どこで役割語を学ぶのだろうかという疑問についても、後の章で検証していく。

1-2 構成

本論文の構成は以下の通りである。

第1章では、本論文を書こうと決めた経緯や動機、経験について自身の考えがまとめてあり、そのうえで構成について説明してある。

第2章では、役割語に焦点をあて、概要や歴史について整理する。また、研究するうえで重要な単語である、ステレオタイプの説明もしている。役割語の種類として、お嬢様語、博士語、等も見ていく。その中でも、男ことば、女ことばに注目し、現在に至るまでの経緯、どのような使われ方がなされているのかをまとめていく。

第3章では、中学校の英語の授業で実際に使われている教科書の英文と直訳文、意識文を比較し、役割語がどのように使われているのかを調べていく。中学1年生から3年生までそれぞれ3冊の教科書に載っている英文を調べた後、どのように役割語が使われているのかを学年ごとに比較し、具体的に分類、分析していく。

第4章では、文学作品の中で使われている役割語を研究するため、世界的に大ヒットしたファンタジー小説『ハリーポッター』シリーズの中から「ハリーポッターと賢者の石」(米国版と日本語版の比較)と、跡見学園をモデルにした跡無女学館が作中に登場する『はいからさんが通る』1巻を採り上げていく。

第5章では、これまでの研究で気づいたことや、新たにわかったことについてまとめてある。役割語を使うことで生まれるメリットとデメリットについても述べ、役割語は今後どのように発展していくのかを考えていく。

第2章 役割語

2-1 概要

大阪大学の教授である金水敏（きんすいさとし）によって提唱された役割語は、まだまだ歴史が浅いものである。金水は、古典文学から現代文学まで幅広い日本語の文法を研究しており、そのなかで役割語という新たな分野を築いた。そして、以下のように定義づけている。

ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢・性別・職業・階層・時代・容姿・風貌・性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。（2003金水敏 p. 205）

例えば、老人や博士は「フォッフオッフオ（笑い声）、そうじゃ、わしは知っとるんじゃ」、貴婦人は「オッホッホッホ（笑い声）、そうですわ、わたくしは存じ上げておりますわ」のような言葉づかいをするイメージがある。このような言葉づかいの老人や貴婦人は、現実社会にはほとんどいないだろう。しかし、普段から日本語を使用している人は、言葉づかいだけで老人、貴婦人のイメージを自然に思い浮かべることができる。これらは、昔から文学作品やメディア作品で繰り返し使われることで、特定のイメージが社会で広く共有されるようになった言葉づかいの一例である。物語の中で、老人としての役割を担う登場人物は老人の役割語を、貴婦人としての役割を担う登場人物は貴婦人の役割語を、あからさまに話すのである。そうすることで、聞き手、読み手が、より理解しやすくなるのである。役割語とは日本語であり日本語でないという意味で、ヴァーチャル日本語と呼ばれている。

例えば、「次の文章にあてはまると思う話し手（人物）を選んでください。」という問題があったとする。

- 1 そうね、私知ってるわ ()
- 2 そうじゃ、わしが知っておる ()
- 3 せや、わてが知っとるんや ()
- 4 そうですわ、わたくしが存じ上げておりますの ()
- 5 そうだよ、ぼく（俺）知ってるのさ ()

ア 老博士 イ 男の子 ウ お嬢様 エ 女の子 オ 関西人

この問題は、ある程度日本語を話すことができる、小学校1年生以上の年齢で、なおかつ日本で育ち日本語を母語としている人なら、ほぼ100%の確率で解答が一致するだろう。

実際に、アルバイトをしている塾に通う、小学1、2、3、4、5、6年生の男女（6：6）12人、中学1、2、3年生の男女（3：3）6人、高校1、2、3年生の男女（3：3）6人、筆者の友人の大学1、2、3、4年生の男女（4：4）8人の、合計32人にこの問題を解いてもらったところ、1（エ）、2（ア）、3（オ）、4（ウ）、5（イ）のように、全ての問題の解答が全員一致した。この問題に本当の答えなど存在しないのだが、なぜ全員の解答が一致したのだら

うか。ちなみに、「あなたは「役割語」という言葉を知っていますか？ Yes or No」という質問に対し、30人全員がNoと答えるという、たいへん興味深い結果が出た。

つまり、それぞれの役割語は、現実社会にはあまり存在しない言葉づかいだが、誰もが無意識に知っているという矛盾が確かに存在することがわかった。と同時に、役割語という言葉自体があまり浸透していないという結果も出た。

2-2 ステレオタイプ

役割語を研究する上で理解しておかなければならないことがある。それはステレオタイプという考え方である。

社会心理学、社会言語学に「ステレオタイプ」という概念がある。我々は日常生活の中で人間を性別、職業、年齢、人種等で分類しがちである。その分類（カテゴリー）に属する人間が共通して持つと信じられている特徴のことを、ステレオタイプという。本能や文化によってあらかじめ用意されたカテゴリーに目の前の対象を当てはめ、そのカテゴリーとセットになった特徴、すなわちステレオタイプを目の前の対象も持っているはずだと仮定してかかって、行動するのである。(2003金水敏 p. 34)

私たちは他者に対して、まず見た目や性別、年齢などで、ある程度カテゴリー別に分類する。その際に、自分が相手のことを深く知る必要がないと脳が判断すれば、そのまま脳の処理が終わる。対象を分類し、それが持つ特徴を仮定して行動するという脳の処理の流れは、動物全般が持っている認知的な特徴である。

例えば、動物が餌を食べる際、目の前にあるものが毒のない食べられる餌かどうか、いちいち確認はしないだろう。だが人間が人間をカテゴリー別に分類する場合は、色々な問題が生じることになる。肌の色や国籍、性別などで判断し、仮定したステレオタイプにあてはめると、偏見や差別が生じることもあるため、注意が必要である。しかし、ステレオタイプは必ずしも現実に反映されるとは限らない。

あるカテゴリーにいったん強固なステレオタイプが結び付けられると、現実世界の中でそのステレオタイプに合わない対象を見ても、ステレオタイプ自体を捨て去るのではなく、その対象が「例外」なのだとして排除する傾向が我々の心にはあるとされる。これを「サブタイプ化」と呼ぶ。たとえば、「女性は仕事ができない」というステレオタイプを持っている人が、バリバリ仕事をこなす女性に出会ったとしても、「彼女はキャリアウーマンだから特別なのだ」と見なして、女性の特別なタイプ（サブタイプ）として扱う。逆に、ステレオタイプに合致する女性に出会うと、「やっぱり女は……」という形でステレオタイプが活性化される。結果的に、どちらにしても、ステレオタイプ自体は保持されてまったく傷つかない。(2002上瀬由美子 p. 60)

このようにステレオタイプが活性化されればされるほど、ステレオタイプはどんどん強化されていく。逆に、ステレオタイプが弱まることはほとんどない。一度完成されたステレオタイプを根底から覆すのは難しいのである。現実には、「～ですわ」「～のよ」「～だわ」等の女ことばや、「～

だ」「～だぜ」「～さ」のような男ことばを話す人は、ほとんど存在しないと理解はしているが、個々に持っているステレオタイプの知識で無意識に考えてしまうのだと言える。

2-3 男ことば

男ことばは、男性語とも呼ばれている。これは男性特有の、「～ぜ」「～だ」「～ぞ」等の言い回しや言葉づかいのことを表している。男性の友人同士など仲間内で使うような少しくだけたような言葉であり、ぶっきらぼうで、強く、乱暴な印象を与えることもある。また、近年では女性が一人称で、僕、俺のように男ことばを使うケースも増加している。

現在使われている男ことばは「書生ことば」が起源だとされている。書生とは、江戸時代末期から明治時代にかけて、大学や私塾で勉強するために東京に集まった若者たちのことである。この「書生ことば」は一部で大流行したとされており、各地方から集まった若者たちが創り上げた言葉のため、西日本と東日本の様々な言葉が混ざり合った新しい言葉であったといえるだろう。特徴は、「僕」「俺」「きみ」「吾輩」「きさま」等の人称である。命令や依頼表現としては、「～したまえ」「～べし」が多く使われていた。「書生ことば」は江戸時代に使われていた武士の言葉がだんだんと変わっていったのではないかと考えられている。また、男性だけが使っていたわけではなく、当初は女性も「書生ことば」を使っていた。時代の流れとともに少しずつ変化しながらも、男ことばはマスメディアの力を借りて現代まで残ってきたと言えるだろう。男性はこのように話すべきだというステレオタイプの考え方が一般的に固定されているのが現状である。

男ことばの使われ方として以下のような分類ができる。

代名詞

「ぼく」「おれ」「きみ」「おまえ」「きさま」等が挙げられる。「わたし」「わたくし」のような丁寧な表現は男女ともに使われることがある。

断定形式

「雨だ」「きれいだ」のような名詞述語文や、「行くんだ」「美味しいんだ」のような表現が挙げられる。「～のだ」のような「だ」を文末で使うことが多い。「～だね」「～だよね」「～だよ」のような終助詞と一緒に用いることもある。

疑問・質問形式

「雨か?」「行くか?」「雨かい?」「行くかい?」などは、男ことばとして使われやすい質問文である。「雨かね?」「行くかね?」の「～かね」は、年配男性のことばとしてとらえやすい。また一般的には女性が使うとされているが、東京では年配男性も「～かしら」を使うことがある。

終助詞

「雨だぞ」「行くぜ」のように終助詞が「ぞ」「ぜ」のような言い回しは男ことばだと考えられる。

命令・依頼・禁止形式

「行け」「～しろ」は動詞の命令形であり、「よ」「よな」などを加えた言い方を男ことばと認識

する。「行くな」等、「～するな」という禁止形式も少し強い印象を与える男ことばである。

感動詞

「おい」「こら」「おお」などは、男ことばとしての言い回しである。笑い声の場合は「ははは」「へへへ」が男性的である。

2-4 女ことば

女ことばとは何かと考えると、たいていのが、女性しか使わないだろうとされている女性特有の言い回しや言葉のことだと言うだろう。

女ことばとは、昔から女性たちの間で根強く使われていたわけではない。しかも現在、女性たちが実際に話している言葉づかいとは別のものである可能性が高い。

なぜ、昔の女性は、今よりも女らしい言葉づかいだったと言われるのだろうか。最近の若い女性の「ことばの乱れ」について検索すると、いくつものヒットする URL が存在する。しかし、最近ではなく実際には明治時代から、既に、女性の使用する言葉が乱れていると言われ続けているのだ。

つまり、ほとんどの日本人にとって、女ことばとは、日常的に使う言葉づかいというよりも、このような話し方が女ことばではないかという勝手な認識を持っているだけである。

次に、女ことばの歴史について見ていく。

室町時代に宮中の女官たちが、高貴な人の前で、衣食住等の身の回りのことを直接的に言うのを避けた「女房詞」というものがある。「女房詞」とは、仲間内だけで使うような隠語的な役割を担っていた。これが後に、優しく、上品で、女らしいことばとして、将軍家や武士の家の女性たちに広まったとされ、さらに一般町民の女性にも普及していった。「女房詞」が現在の女ことばに大きな影響を与えたと言っても過言ではないだろう。例えば、「おなか」「おひや」「おしろい」「おいしい」等は「女房詞」である。

江戸時代初期には、「遊女語」という特殊なことばが登場する。日本全国の主要都市に開設された遊里と呼ばれる場所に住む、遊女たちの使う言葉づかいである。文末に「んす」をつけることで、尊敬、丁寧な印象を与えている。「ありんす」「ござんす」「ざんす」等は「遊女語」とされている。

明治期には「女学生ことば」が誕生する。これが、いわゆる「お嬢様語」の語源である。文字どおり、私たちが一般的にイメージするお嬢様が使っていそうな言葉づかいや言い回しのことである。「～てよ」「～だわ」「ごきげんよう」等、とても丁寧で上品な印象が感じられる。「お嬢様語」は、かつて「てよだわ言葉」とも呼ばれていた。明治時代に女性も教育を受けられるようになり、女学校が次々と誕生した。「てよだわ言葉」はそこで多用されるようになったと考えられている。尾崎紅葉によると、最初は小学校で使われていた「てよだわ言葉」は、その世代の成長とともに高等女学校や、それ以降の学校で女性たちの間に広まっていったという。女学生たちが、この言葉づかいをするようになった理由として、良妻賢母教育への抵抗という考えがある。

彼女たちは「女学校」という囲われた空間内を、「ハイカラスタイル」と「テヨダワことば」で充満させ、囲いの外にふりかざされる良妻賢母像を、さりげなく無化にしてしまった (1990 本田和子 p. 134)

しかし、見識ある人物からは荒々しく、品のない言葉づかいとして、あまり良く思われていなかった過去も存在するが、「てよだわ言葉」自体が悪いのではなく、その言葉づかいは悪いものであるとメディアによって印象づけられてしまったために、悪いものだとしてしまった。が、それ以上にこの言葉が女学生たちの間で使われたことや、当時の小説家たちが女学生の言葉づかいとして小説内で「てよだわ言葉」を多用した結果、今日まで残っているというのが事実である。学校というひとつの場から広がり、少女雑誌の流行によって急速に広まることになった。

女ことばの使われ方として以下のような分類ができる。

代名詞

「あたし」「あたい」「あなた」等が挙げられ、「わたし」「わたくし」は丁寧な表現として男女ともに使われている。「きみ」は男ことばとしての認識であったが、最近は女性が使っても自然に感じるようになった。

断定形式

「雨よ」「きれいね」等、男ことばでは「雨だよ」「きれいだね」と使われていた「だ」を省略するのが名詞述語文である。また男ことばの場合「～だね」「～だよね」「～だよ」とされていた文末も、「だ」を省略することによって終助詞と一緒に用いることが可能である。

疑問・質問形式

「雨かしら」「行くかしら」のように「～かしら」が質問文として多用される。また肯定的な意味でも使われることもある。

終助詞

「雨だわ」「行くわ」のように終助詞が「わ」とされるのが一般的な女ことばである。これは、文末を上昇気味にするのが前提である。

命令・依頼・禁止形式

「行ってね」「～してよ」「行ってちょうだい」「してくださる？」のような丁寧なものは女ことばとして認識される。ただし、「上から目線」的な印象を与えることもある。また、「行かないで」のような「～しないで」という言い回しの禁止形式は女ことばとされるが、男性が使っても違和感がなくなっている。

感動詞

「あら」「まあ」等は、女ことばとしての言い回しに分類される。笑い声の場合は「ほほほ」「うふふ」等が女性的である。

第3章 中学英語教材における役割語

3-1 直訳と意識

例えば、以下のような文を考えてみる。

Hi, I am Mike Brown. I am a new student.

Oh, you are Mike. I am Yuki, nice to meet you.

Nice to meet you too, Yuki.

この英文を直訳すると、

こんにちは、私はマイク・ブラウンです。私は新しい生徒です。

まあ、あなたはマイクです。私は由紀です。初めまして、お会いできてうれしいです。

こちらこそお会いできてうれしいです、由紀。

この英文を意識すると、

こんにちは、僕はマイク・ブラウンです。僕は転校生です。

まあ、あなたはマイクね。私は由紀です。初めまして、お会いできてうれしいです。

こちらこそお会いできてうれしいです、由紀。

このように、英語の勉強をする際は、基本的に本文である英文を日本語に訳しながら進めていくだろう。英文をそのまま日本語に訳すことを直訳という。

意識は、ふだん私たちが日常的に話している言葉のような日本語になるように訳すことである。つまり、話者が何らかの意図や感情を込めて発話している言葉を、原文の表面的な文法構造にとらわれずに、表現したい感情、伝えたいことを理解し、「その状況・気持ちならば、この話し手は自然な言い方で何と言うだろうか?」というイメージで、適切な言い回しを選び出すということになる。男性が話し手の場合は、「I」が「僕」に変わり、女性が話し手の場合は語尾が「～ね」「～わ」のように女ことばに変換される等、話し手によって日本語への訳し方が変化する。本章では、中学英語の教科書の中に書かれている英文に対して、日本語訳（直訳と意識）を比較し、役割語がどの程度使われているかを調べていく。

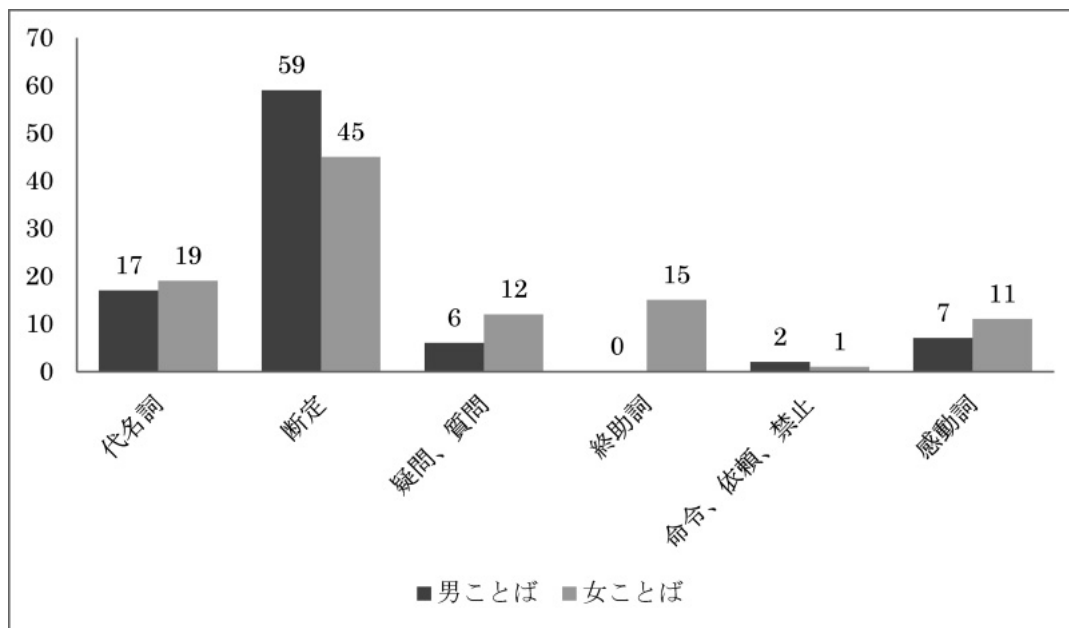
今回使う教科書は、開隆堂が出版している SUNSHINE ENGLISH COURSE 1、2、3の3冊である。（これ以降、サンシャインと記載する）サンシャイン1は中学1年生用、サンシャイン2は中学2年生用、サンシャイン3は中学3年生用の教材である。サンシャインは学ぶ文法ごとに単元が、PROGRAM 1、2、3、4……と、分かれている。次の節では、PROGRAMごとに役割語がどの程度使われているのかを詳しく分析する。

3-2 中学1年生

サンシャイン1では PROGRAM 1-1、1-2、1-3、2-1、2-2、3-1、3-2、4-1、4-2、4-3、5-1、5-2、5-3、6-1、6-2、6-3、7-1、7-2、7-3、8-1、8

-2、8-3、9-1、9-2、9-3、10-1、10-2、10-3、11-1、11-2、11-3、の計30項目の英文の中から、役割語が日本語訳でどの程度使われているのか調べる。

このなかで役割語が使われていたのは、PROGRAM 1-1、1-2、1-3、2-1、2-2、3-1、3-2、4-1、4-2、4-3、5-1、5-2、5-3、6-1、6-2、6-3、7-1、7-2、7-3、8-1、8-2、8-3、9-1、9-2、9-3、10-1、10-2、10-3、11-3の28項目であり、残りのPROGRAM 11-1、11-2、の2項目は役割語が使われていないという結果になった。30項目中28項目に役割語が登場するという、かなり高い頻度で使われていることがわかった。代名詞、断定形式、疑問質問形式、終助詞、命令依頼禁止形式、感動詞の6つに分類したところ、以下の表のような結果になった。(表の縦軸は出現回数である)



男ことばとして使われていた代名詞は17回、断定形式は59回、質問疑問形式は6回、終助詞は0回、命令依頼禁止形式は2回、感動詞は7回である。1番多く使われていたのは、断定形式ということがわかった。2番目は代名詞、3番目は感動詞という結果になった。

中学1年生の日本人男子生徒として登場する武(たけし)と、同じ年でアメリカからの転校生マイク(アメリカ人)の会話を見てみる。PROGRAM 4-3(サンシャイン1 p.42-43)の本文の中に、*Oh, you have a lot of bottle caps. How many caps do you have?* というマイクの問いかけに対し、武が、*I have about 500.* と答える会話がある。この英文の直訳は、「おお あなたは持っています たくさんのボトルキャップを」「何個のキャップを あなたは持っていますか」「私は持っています およそ500個を」となっている。

意識になると「わあ、ボトルのキャップをたくさん持っているね。キャップを何個持っているの。」「およそ500個持っているよ。」となる。文末を「~の」「~ね」「~よ」と変えることで、より話し言葉に近づけているのだと推測できる。

女ことばとして使われていた代名詞は19回、断定形式は45回、質問疑問形式は12回、終助詞は15回、命令依頼禁止形式は1回、感動詞は11回である。男ことば同様に1番多く使われていたの

も断定形式である。2番目は代名詞、3番目は終助詞という結果になった。

中学1年生の日本人女生徒として登場する由紀（ゆき）が夏休みにイギリスへホームステイに行ったという設定で、ホストファミリーのジュディー（女の子）が友達のマット（男の子）と3人でロンドンを歩くという場面の会話を見てみる。

PROGRAM6-1 (サンシャイン1 p.60-61) にて本文抜粋

Yuki: Wow! London is a wonderful city.

Judy: Yes. We have a lot of interesting places. Look! That's Matt.

Yuki: Hi, matt. Judy always talks about you.

Judy: Matt is a Sherlock Holmes fan. He knows a lot about Sherlock Holmes.

Matt: Let's go to Baker Street by tube.

この英文の直訳と意識は以下の通りである。（サンシャイン1 準拠 p.84-85より抜粋）

由紀「うわー ロンドンは ですよ すばらしい都市」

ジュディー「はい あります たくさんの おもしろい場所が 見てください あちらはマットです」

由紀「こんにちは マット ジュディーはいつも 話します あなたについて」

ジュディー「マットは ですよ シャーロック・ホームズファン 彼は 知っています たくさん シャーロック・ホームズについて」

マット「行きましょう ベーカー街へ 地下鉄で」

由紀「うわー。ロンドンですばらしい都市ね。」

ジュディー「ええ。たくさんのおもしろい場所があるのよ。見て！あちらはマットよ。」

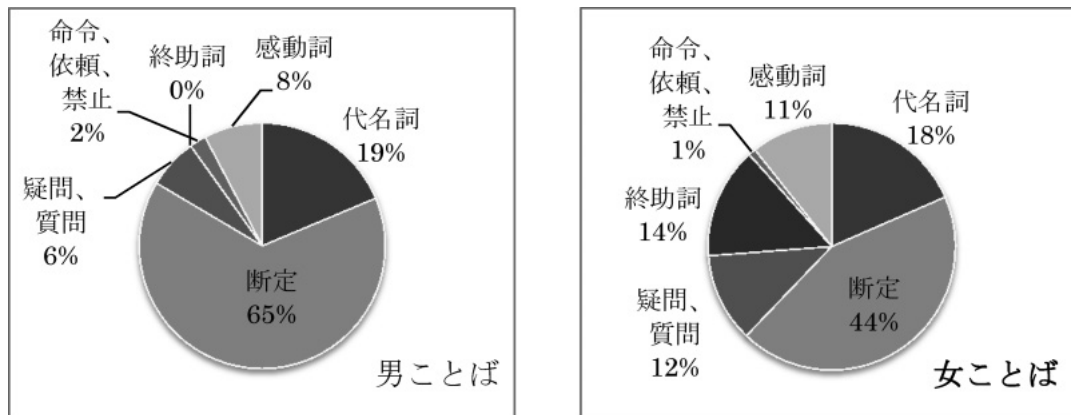
由紀「こんにちは、マット。ジュディーはいつもあなたについて話しているわ。」

ジュディー「マットはシャーロック・ホームズファンなのよ。シャーロック・ホームズについてたくさん知っているの。」

マット「地下鉄でベーカー街へ行こう。」

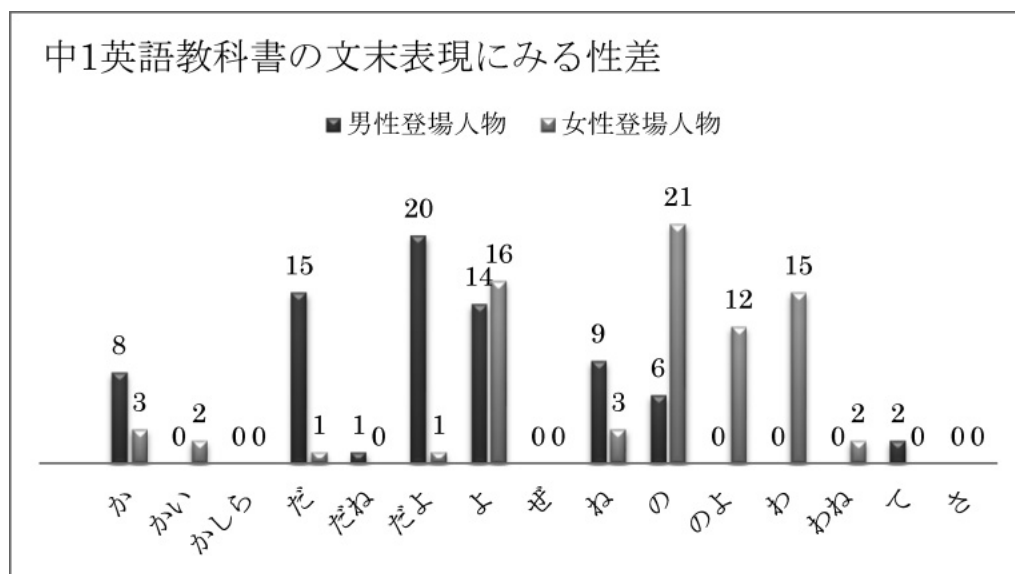
このように「男ことば」や「女ことば」が登場する。由紀やジュディーの話していることばの語尾が全て「～ね」「～のよ」「～わ」と、典型的な女ことばに変わっている。また、Yes（はい）が、女性の場合は「ええ」となるのが特徴的である。

役割語が使われている割合を、男ことばと女ことばに分類したのが以下の図である。



男ことばは、代名詞と断定形式で85%を占めている。女ことばは、代名詞と断定形式で60%以上を占めており、ついで終助詞、疑問質問形式、感動詞がバランスよく使われていることがわかった。男ことばとしての終助詞0%と比べると、女ことばの終助詞は14%もあり、文末表現として「～わ」が多く使われているという印象を強く受けた。

そこで今度は、男ことば、女ことば同様に高い割合で登場した役割語の文末に注目していく。



男性登場人物の発した言葉の中で、最も多いのは「～だよ」である。2番目は「～だ」、3番目は「～よ」、4番目は「～ね」、5番目は「～か」という結果になった。This is my father「こちらは父だよ」、I love Korean food「ぼくは韓国料理が大好きなんだ」、のように「～だ」「～だよ」は、典型的な男ことばとして多く使われるだろうという予想をしていたが、3番目に「～よ」がくるとは思わなかった。しかし、文章を見ていくと、少年が「一緒に来てよ」「食べようよ」等と依頼形式で使うことがあった。他には、I can't「～できないよ」というように使われていた。

女性登場人物の発した言葉の中で、最も多いのは「～の」である。2番目は「～よ」、3番目は「～わ」、4番目は「～のよ」となる。4番目と5番目の間に差がみられるものの、5番目

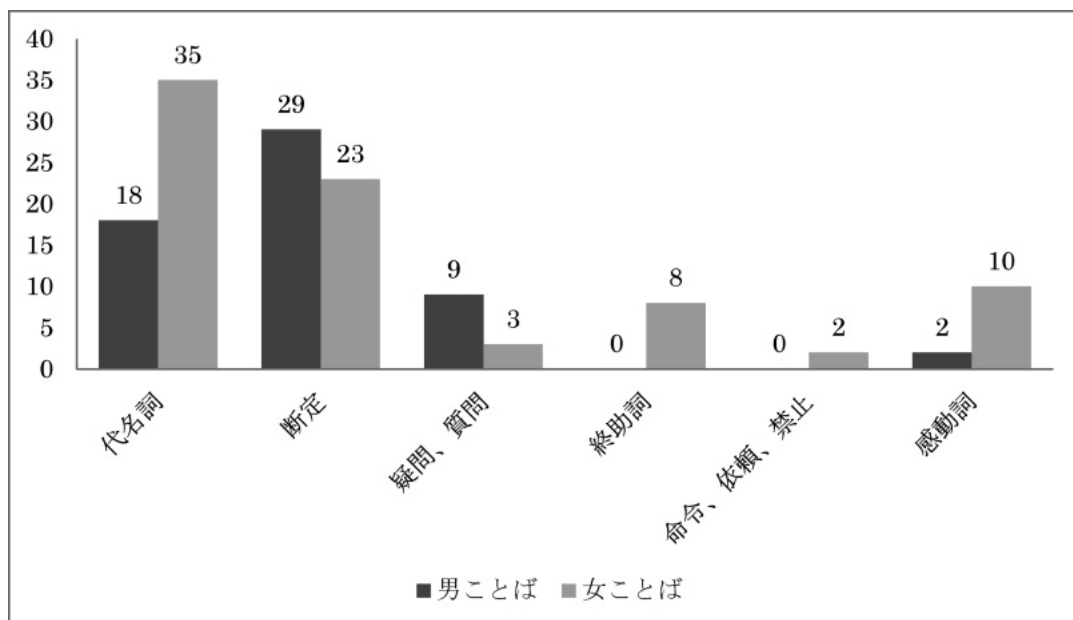
降はあまり大差ないという結果になった。また、年齢による言葉の使い分けはほとんどなく、中学1年生の女性も、30代くらいの女性も皆、同じような言葉づかいをしていた。Where is 「どこにあるの」のように上昇調の疑問形で使うこともあれば、I'm changing my clothes 「私は服を着替えているの」のように「～の」が使われていた。

また、珍しい事例として「～かい」という文末表現がある。これは、家族間での会話のやりとりの場面で、祖母からの電話に孫が出た際に、「もしもし、おばあちゃんだよ、○○かい？元氣かい？」と、老女が使っている言葉として登場した。

3-3 中学2年生

サンシャイン2は、PROGRAM 1-1、1-2、1-3、2-1、2-2、2-3、3-1、3-2、3-3、4-1、4-2、4-3、5-1、5-2、5-3、6-1、6-2、6-3、7-1、7-2、7-3、8-1、8-2、8-3、9-1、9-2、9-3、10-1、10-2、10-3、11-1、11-2、11-3、12-1、12-2、12-3、の計36項目の英本文の中から、役割語が日本語訳でどの程度使われているのかを調べる。

このなかで役割語が使われていたのは、PROGRAM 1-1、1-2、1-3、2-1、2-2、3-2、3-3、4-1、4-2、4-3、5-1、5-2、6-1、6-2、6-3、7-1、7-2、7-3、8-1、9-2、10-1、10-2、10-3、11-1、11-3、12-1、12-2、の計27項目であり、残りの2-3、3-1、5-3、8-2、8-3、9-1、9-3、11-2、12-3、の計9項目には役割語が使われていなかった。36項目中27項目という高確率で役割語が登場することがわかった。代名詞、断定形式、疑問質問形式、終助詞、命令依頼禁止形式、感動詞の6つに分類したところ、以下の表のような結果になった。(表の縦軸は出現回数である)

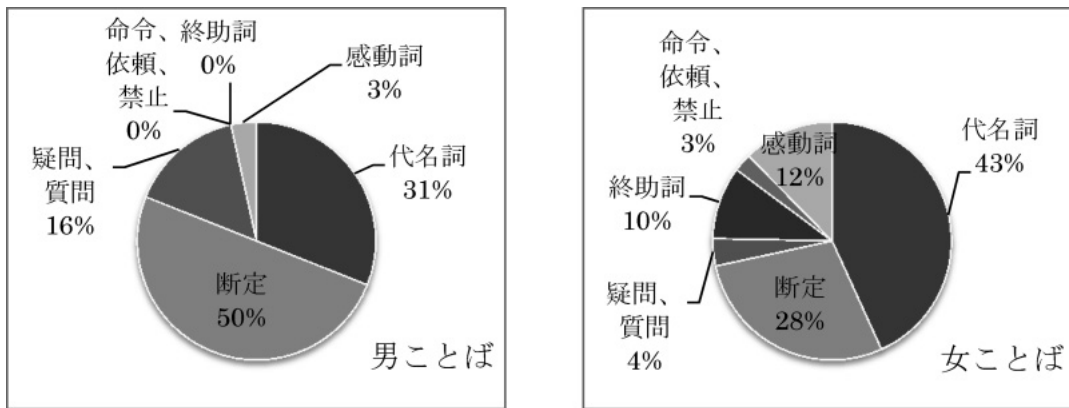


男ことばとして使われていた代名詞は18回、断定形式は29回、質問疑問形式は9回、終助詞は0回、命令依頼禁止形式は0回、感動詞は2回である。1番多く使われていたのは断定形式で、

2番目は代名詞、3番目は疑問質問形式という結果になった。

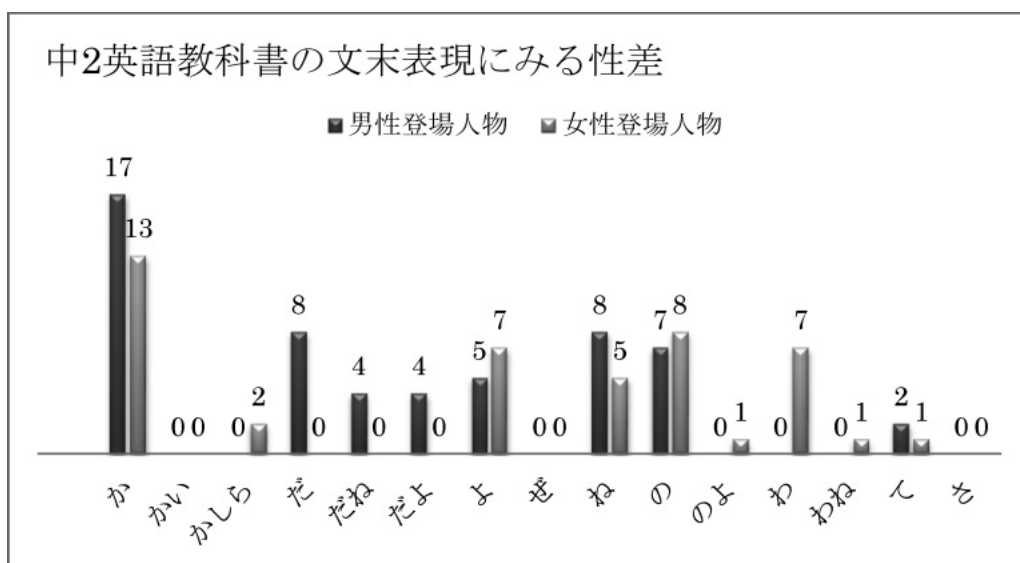
女ことばとして使われていた代名詞は35回、断定形式は23回、質問疑問形式は3回、終助詞は8回、命令依頼禁止形式は2回、感動詞は10回である。1番多く使われていたのは代名詞である。2番目は断定形式、3番目は感動詞という結果になった。

男ことば、女ことば共に代名詞と断定形式が多いことがわかる。また、サンシャイン2では、友人同士の会話文や、過去に起きた出来事について話し合う場面が多いため、女ことばに関しては感動詞が3番目に多くなり、男ことばでは疑問質問形式が多くなったのではないかと推測する。次に、役割語が使われている割合を、男ことばと女ことばに分けてみていく。



男ことばは、代名詞と断定形式で80%以上を占めている。次に疑問質問形式が16%、感動詞が3%、命令依頼禁止、終助詞は0%である。女ことばは、代名詞と断定形式で70%以上を占めており、ついで感動詞が12%、終助詞が10%、疑問質問形式が4%、命令依頼禁止が3%という結果になった。男ことばに比べると、女ことばとしての役割語の方が、様々な使い方をされていることがわかった。また感動詞としては、「Oh」の訳し方が女性の場合は「あら」「まあ」と訳されているのが印象的である。文末表現としては「～よ」「～か」「～だ」等が使われていた。

そこで次は、男ことば、女ことば同様に高い割合で登場した、役割語の文末に注目していく。



男性登場人物の発した言葉の中で、最も多いのは「～か」である。2番目は「～だ」「～ね」が同数である。また、それ以降はそれほど大差ないという結果になった。最も多く使われた「～か」については、武（たけし）の言葉、Walk the world? 「ウォーク・ザ・ワールドですか?」のように、疑問質問形式で使われていることも多かった。武と同様に中学2年生の、アメリカ人男子学生、マイクの言葉、Good idea! 「良い考えです」の意識が「良い考えだね!」と、男ことばとしての「～だね」が文末表現として使われている。

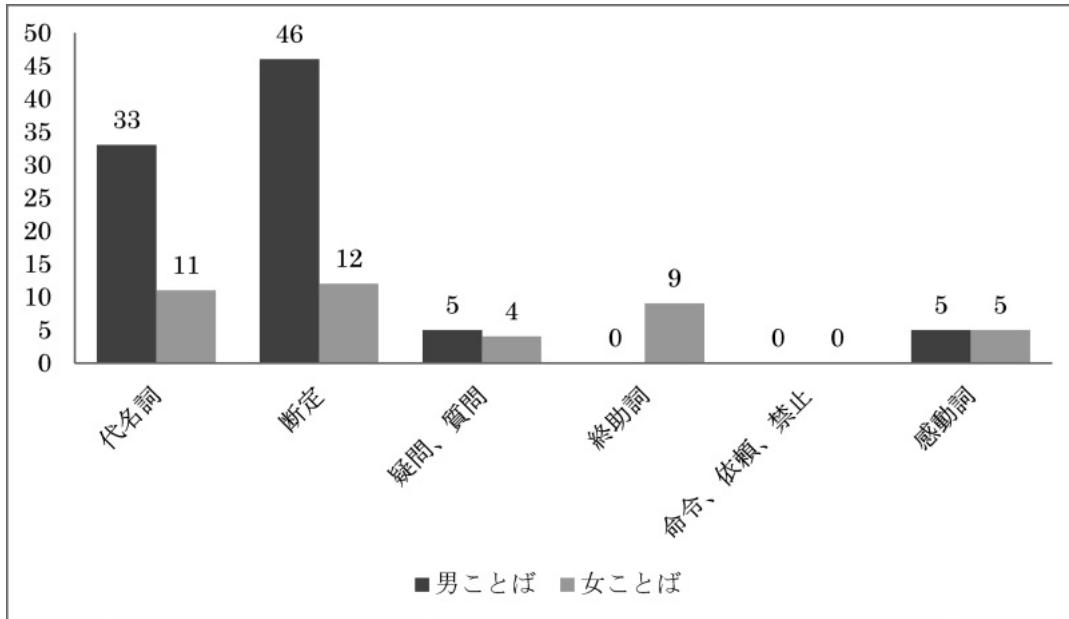
サンシャイン2では、とても興味深い単元があった。PROGRAM 4では、星新一原作の『新発明のマクラ』という作品の一部が載っており、登場人物のエフ博士が、寝ながらにして英語の勉強ができる枕を開発し、訪ねてきた隣人がその枕を試してみるという内容である。そこに登場する隣人の言葉づかいが特徴的である。Great! 「すごいです」の意識が「すごいですね!」や、study? 「勉強ですか?」の意識が「勉強ですって?」、You can have wonderful dreams 「あなたは見られます すばらしい夢を」の意識が「すばらしい夢を見られるのでしょうね」と、女ことばのように訳されていることが多かったが、隣人は娘がいる男性（父親）であることがわかった。東京では年配の男性も「～かしら」「～でしょう」「～ね」等、女性らしい表現を使い、柔らかで優しい印象を与えることもあるらしい。

女性登場人物の発した言葉の中で、最も多いのは「～か」である。2番目は「～の」、3番目は「～よ」「～わ」、それ以降はほとんど大差がなかった。英語の先生として登場するアメリカ人の女性が、What did you do there? 「あなたはそこで何をしたのですか?」 Really? 「本当ですか?」等のように使われている。中学2年生の日本人女子学生、由紀（ゆき）が、I can talk 「私は話すことができます」の意識が「私は話すことができるの」や、We have to understand the differences 「私たちは理解しなければなりません その違いを」の意識が、「私たちはその違いを理解しなければならないわ」等、語尾が「～の」「～よ」「～わ」に変わっていた。また、Yes 「はい」は、女性が発すると「ええ」になっているのが特徴的である。

3-4 中学3年生

サンシャイン3では、PROGRAM 1-1、1-2、1-3、PROGRAM 2-1、2-2、2-3、PROGRAM 3-1、3-2、3-3、PROGRAM 4-1、4-2、4-3、4-4、PROGRAM 5-1、5-2、5-3、PROGRAM 6-1、6-2、6-3、PROGRAM 7-1、7-2、7-3、PROGRAM 8-1、8-2、8-3、PROGRAM 9-1、9-2、9-3、9-4、PROGRAM 10-1、10-2、10-3、の計32項目の文の中から、役割語が日本語訳でどの程度使われているのかを調べる。

このなかで役割語が使われていたのは、PROGRAM 1-1、1-2、1-3、2-1、2-2、2-3、3-1、3-2、3-3、5-1、5-2、6-1、8-1、8-2、10-1、10-2、10-3、の計17項目であり、残りのPROGRAM 4-1、4-2、4-3、4-4、5-3、6-2、6-3、7-1、7-2、7-3、8-3、9-1、9-2、9-3、9-4、の15項目は役割語が使われていないという結果になった。全ての内容で役割語が使われているわけではなく、およそ半分だということがわかった。役割語が登場しなかったページは物語や説明文が多く、役割語が登場するページは人と人の会話がメインになっていることが多かった。使われていた役割語を代名詞、断定形式、疑問質問形式、終助詞、命令依頼禁止形式、感動詞の6つに分類したところ、次の表のような結果になった。(表の縦軸は出現回数である)

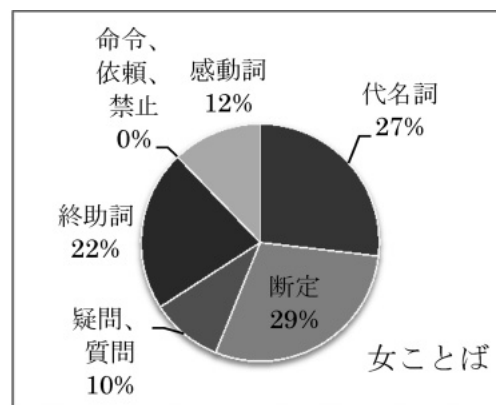
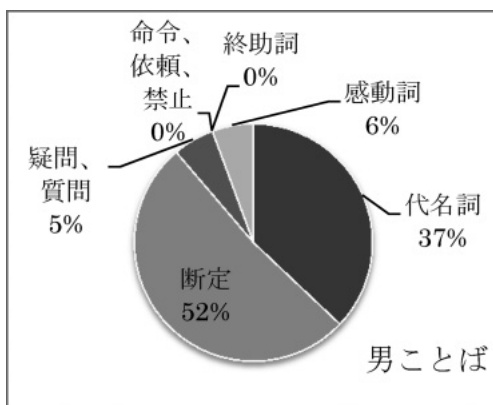


男ことばとして使われていた代名詞は33回、断定形式は46回、質問疑問形式は5回、終助詞は0回、命令依頼禁止形式は0回、感動詞は5回である。最も多く使われていたのは断定形式で、2番目は代名詞、3番目は疑問質問形式と感動詞が同率という結果になった。

女ことばとして使われていた代名詞は11回、断定形式は12回、質問疑問形式は4回、終助詞は9回、命令依頼禁止形式は0回、感動詞は5回である。1番多く使われていたのは断定形式である。2番目は代名詞、3番目は終助詞という結果になった。

男ことば、女ことば共に代名詞と断定形式が多いことがわかる。またサンシャイン3では、人と人との会話文が少なく物語や説明文が多かったことが、役割語があまり使われていない原因ではないかと推測する。男ことばの断定形式、代名詞として使われた役割語がかなり多く、女ことばとして使われた役割語はあまり目立たない結果になった。

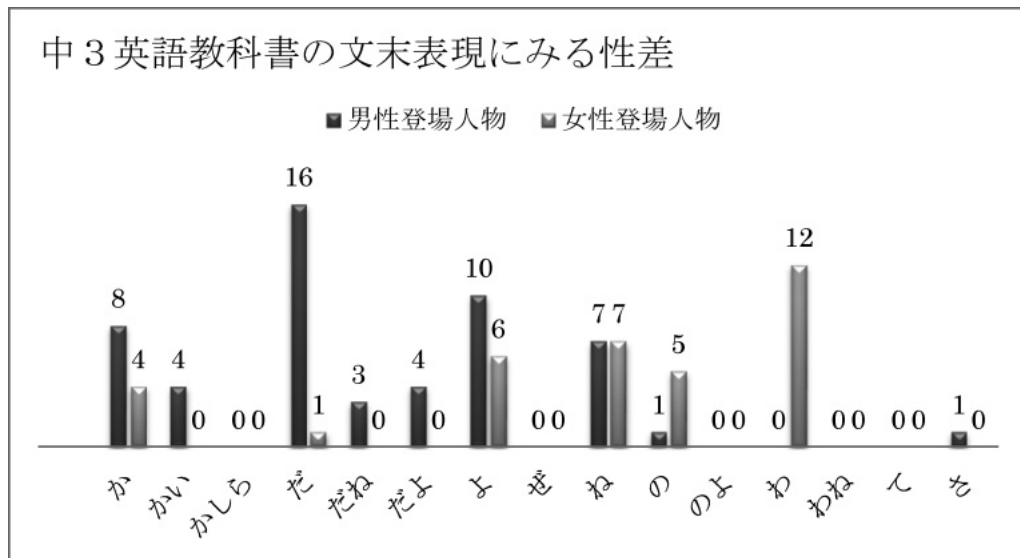
次に、役割語が使われている割合を、男ことばと女ことばに分けて見ていく。



男ことばは、代名詞と断定形式で約90%を占めている。女ことばは、代名詞と断定形式で56%

を占めており、ついで終助詞、疑問質問形式、感動詞がバランスよく使われていることがわかった。男ことばとしての終助詞0%と比べると、女ことばの終助詞は22%もある。

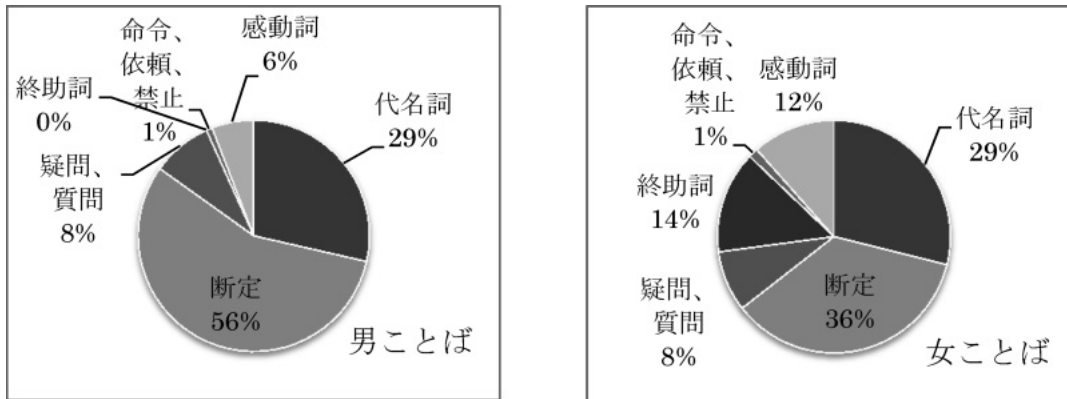
そこで次は、男ことば、女ことば同様に高い割合で登場した、役割語の文末に注目していく。



男性登場人物の発した言葉の中で、最も多いのは「～だ」である。2番目は「～よ」、3番目は「～か」、4番目は「～ね」、という結果になった。中学3年生の日本人男子中学生、武（たけし）は、Plastic bags are made from oil「ビニール袋は 石油から作られています」の意識が「ビニール袋は石油から作られているんだ。」や、38歳の男性同士の会話の中で、I work for the city「私は 働いています 市のために」の意識が、「僕は市に勤めているんだ」のように、語尾「～だ」が多く使われていた。10代少年も30代男性も同じような口調である。また、20年来の友人と再会する場面では、相手を確認するためにIs that you?「あなたですか?」の意識が「きみかい?」とされているなど、年配の人が使うような言葉づかいが確認できた。

女性登場人物の発した言葉の中で、最も多いのは「～わ」である。2番目は「～ね」、3番目は「～よ」、4番目以降はあまり大差ないという結果になった。また、年齢による差は男ことば同様にあまりなかった。中学3年生の日本人女子生徒、桃子（ももこ）と、同い年で外国人女子生徒のリサの会話をみると、2人とも典型的な女ことばを使っており、口調に差はなかった。You can still use this chair「あなたがたは まだ使うことができます このいすを」の意識が「このいすはまだ使えるわ!」や、You look happy「あなたは 見えます 幸せに」の意識が「うれしそうね」等の使われ方がされている。

3-5 学年ごとの差異



全体で比較すると、男ことば、女ことば共に1番用いられているのは断定形式である。2番目は代名詞という同じ結果が出た。やはり、役割語として表現しやすいのは人称と文末表現なのである。また、英文を日本語訳にした際に直訳から意識にうつる過程で役割語が多く登場することがわかった。

中学1年の断定表現は男ことば59回、女ことば45回である。中学2年の断定表現は男ことば29回、女ことば23回である。中学3年の断定表現は男ことば46回、女ことば12回である。男ことばとしての断定表現は中学1年生が最も多く、2番目は3年生、3番目は2年生であった。女ことばとしての断定表現は、多い順に中学1、2、3年生という結果になった。中学1年生の教科書の内容は、人と人の会話文が多いため、役割語が使われる割合も高かった。学年が上がるにつれて、会話文が少なくなり、物語や説明文が多くなる傾向がある。特に説明文の意識は直訳とほぼ変わらないため、役割語があまり使われないという結果が出た。

代名詞としては、英語の場合「I」「You」「We」等、決まった言葉づかいしか使われないのに対し、日本語は話し手に合わせて使い分けが生じていた。例えば「I」は、外国人男子中学生のマイクや日本人男子中学生の武の一人称は「僕」である。女性の場合は全員「私」を使用していた。また、年配の男性は「私」を使っていた。「You」は、基本的には「あなた」や、「あなたたち」が使われているが、30代男性は「きみ」を使用していた。「We」は、女性が話し手の場合は「私たち」、少年が話し手の場合は「僕たち」が使われている。

感嘆詞「Oh」についても、話し手が男性か女性によって訳し方が変わることがわかった。男性の場合は「ああ」、女性の場合は「ああ」「まあ」「あら」と表現される。

また、「Yes」という言葉についても、話し手が男性と女性の場合で訳し方が変わることがわかった。男性の場合は「はい」「うん」となるのに対し、女性の場合は「ええ」と表現されていた。

意識とは、普段私たちが日常的に話している言葉のような日本語になるように訳すことであるとまとめたが、日常的に使っている言葉づかいというよりは、このような言葉づかいをしているだろうという臆測で訳すことが意識ではないか気がついた。翻訳語としては役割語がかなり用いられているが、実際に日常会話で使っているかと考えると、必ずしもそうとは言えないだろう。しかし、翻訳語(書き言葉)としての男ことば、女ことばは確かに存在していることがわかった。

英語の教科書では、各学年のレベルに合わせた内容の構成がされている。役割語を用いることで、状況に合わせた日本語と英語を学ぶことができる。そのため、より自分の中に英語を取り入れやすくする狙いがあるのではないかと考える。

第4章 文学作品における役割語

4-1 日本 『はいからさんが通る』

本節で採り上げる作品は、大和和紀著の『はいからさんが通る』第1巻である。これは、全4巻の漫画であり、大正時代の東京を舞台に繰り広げられるロマンティックラブコメディとして、少女漫画好きなら誰もが知っている歴史的な名作である。

「はいからさん」こと主人公の花村紅緒（はなむらべにお）は、竹刀を握れば向かうところ敵なしのじゃじゃ馬娘。ひよんなことから知り合ったハンサムで笑い上戸の青年将校、伊集院忍（いじゅういんしのぶ）が祖父母の代からの許嫁と聞かされる。勝手に結婚を決められたことに納得がいかず、最初は嫌がり周りを巻き込みながら必死に抵抗していく。やがて、伊集院家に招かれ花嫁修業をすることになった紅緒だが、そこでも相変わらず騒動を起こしていく。しかし、だんだん紅緒と忍はお互いをかけがえのない存在と思うようになるが、非情な運命によって引き裂かれてしまう……が、最後に結ばれる、というあらすじである。

「はいからさん」の思想や生活、言葉づかいなど、今までの大正時代のイメージを覆すような魅力が詰まっている作品である。紅緒や、親友の北小路環（きたこうじたまき）のはいからぶりは、単にファッションや恋愛観だけでなく、彼女たちのライフスタイルにも表れている。大正時代の彼女たちを通して、これからの女性がどのように生き、働くべきかを考えることができる。

作中で、紅緒や環の通っている跡無女学館は、現在の跡見学園をモデルにしたとされている。跡無女学館の女教諭は、行儀作法、花嫁修業をしっかりと学び、よき殿方に見いだされなければならないという思想の持ち主である。日本国のよき妻、よき母にならないと、女学生たちに教える。しかし、環が

「わたくしたちは ひとりの人間として女性として ひとりの殿方をえらぶのです」「わたしたちは殿方にえらばれるのではなく わたしたちが殿方をえらぶのです そのための勉強ならいくらでもいたします」(1995大和和紀 p. 19-20)

新しい時代として、女性の社会進出に意欲的で、親の決めた縁談ではなく、自分たちで決めるのだという考え方をしっかりと持ち、女教師に抗議している場面があるのも特徴的である。

次の文は、女学館にて紅緒や友人との会話を楽しんでいる時に、それを女教師が遮るという場面である。

「ごきげんよう紅緒さん」「あらどうなさったの？足……」「ねえねえごらんになった？」「おとうさまにおねだりしてつれてっていただいたの すてきだったわ～～」「みなさま！始業の鐘はとっくになったんごますよ いつまでおしゃべりしてるんごますかーっ」(1995大和和紀 p. 16)

このように女学生は典型的な女ことば、「てよだわ言葉」で会話している。終助詞としての「～わ」は、発言を相手に知らせる役割もある。

女教師は「ごあます言葉」と呼ばれる言葉づかいを用いている。「～ごあます」は、「ごぞいませ」が変化した形である。江戸時代に「～ごます」「～ごんす」が遊女の言葉として使われてい

た。この言葉づかいを使う人物は、『はいからさんが通る』に限らず、たいていどの作品でも眼鏡をかけていて、堅苦しい態度で規則に厳しい教育者的な立ち位置にいる女性である。

4-2 海外 『ハリーポッター』

ハリーポッターシリーズは、J.K. ローリング著の世界的ベストセラー作品である。今回扱うのは第1作目の「ハリーポッターと賢者の石」である。本節は参考文献にも記載したとおり、米国版と日本語版を比較する。そのため、以下の引用箇所は米国版、日本語版と表記してある。

主人公のハリーは、赤ん坊の時に両親を交通事故で亡くし、意地悪な叔母家族の家で暮らしていた。11歳の誕生日に、実は自分が魔法使いであることを知る。しかも、当時魔法界を支配しようとしていた最強の闇の魔法使い、通称「例のあの人」(ヴォルデモート) から唯一生き残った伝説の人物であることを知る。両親はヴォルデモートに殺されたという事実を知ったハリーは、幼い魔女や魔法使いが魔法についての理論や実技を学ぶための7年制の教育機関、ホグワーツ魔法魔術学校に入学を決意する。そこで出会った仲間たち(ロン、ハーマイオニー等)と一緒に魔法の勉強をしながら成長していくというストーリーである。

以下の文は、主人公のハリーが、後に親友となるロン、ハーマイオニーと出会う場面である。

“Are you sure that’s a real spell?” said the girl. “Well, it’s not very good, is it? I’ve tried a few simple spells just for practice and it’s all worked for me. Nobody in my family’s magic at all, it was ever such a surprise when I got my letter, but I was ever so pleased, of course, I mean, it’s the very best school of witchcraft there is, I’ve heard — I’ve learned all out course books by heart, of course, I just hope it will be enough — I’m Hermione Granger, by the way, who are you?”

She said all this very fast.

Harry looked at Ron, and was relieved to see by his stunned face that he hadn’t learned all the course books by heart either.

“I’m Ron Weasley,” Ron muttered.

“Harry Potter,” said Harry.

“Are you really?” said Hermione. “I know all about you, of course — I got a few extra books for background reading, and you’re in Modern Magical History and The Rise and Fall of the Dark Arts and Great Wizarding Events of the Twentieth Century.”

“Am I?” said Harry, felling dazed.

“Goodness, didn’t you know, I’d have found out everything I could if it was me,” said Hermione. (米国版 p. 105-106)

「その呪文、間違っていないの？」と女の子が言った。

「まあ、あんまりうまくいかなかったわね。私も練習のつもりで簡単な呪文を試してみたことがあるけど、みんなうまくいったわ。私の家族に魔法族は誰もいないの。だから、手紙をもらった時、驚いたわ。でももちろんうれしかったわ。だって、最高の魔法学校だって聞いているもの……教科書はもちろん、全部暗記したわ。それだけで足りるといいんだけど……私、ハー

マイオニー・グレンジャー。あなた方は？」女の子は一気にこれだけを言ってのけた。

ハリーはロンの顔を見てホッとした。ロンも、ハリーと同じく教科書を暗記していないらしく、唾然としていた。

「僕、ロン・ウィーズリー」ロンはモゴモゴ言った。

「ハリー・ポッター」

「ほんとに？私、もちろんあなたのこと全部知ってるわ。——参考書を二、三冊読んだの。あなたのこと、『近代魔法史』『闇の魔術の興亡』『二十世紀の魔法大事件』なんかに出てるわ」

「僕が？」ハリーは呆然とした。

「まあ、知らなかったの。私があなただったら、できるだけ全部調べるけど。」(日本語版 p. 158-159)

主人公のハリーの1人称は「僕」である。物語の主人公として、勇気、正義感にあふれ、知恵のある人物として表現されている。いわば、賢いヒーロー像がつけられている。このようなヒーローは必ず「僕」を使うとされてきた。しかし、強いイメージや野心的な考え方、身体能力の高く、頼れるヒーローのような男子の場合は「俺」が使われるようになった。友人のロンも1人称はハリー同様に「僕」と表現されている。ハリーは優秀で、身体能力も高いため、「俺」を使う可能性も十分あるが、この訳し方は翻訳した松岡のこだわりであると推測する。

ハーマイオニーは典型的な女ことばを使っている。設定は11歳だが、実際に日本人の11歳の少女がハーマイオニーのような話し方をするだろうか考えると、そんな少女はどこにもいないだろう。

上昇調の終助詞「～わ」は詠嘆、断定の機能をもつ代表的な女ことばとされている。しかし、実際に現代の日常生活の話しことばで「～わ」を使用する女性はほとんど存在しない。また、小説や漫画などで使われる「～わ」は、断定を和らげる働きをするのではなく、主張の強い場面や態度、相手を見下したような態度を表す場合に用いられている。

ハーマイオニーが小説で初めて登場した時、ロンやハリーと出会い、興奮状態になっている。それに加えて自分が教科書の内容を全て暗記したという、2人より優位に立ったからこそ表れる自信や誇りがこめられた発話だとも受け取ることができる。このように分析すると、ハーマイオニーの使っている女ことばは、「和らげな」女らしさを表現する機能として使われているのではなく、その女性の「強さ」を表す記号として使われていることがわかる。

次に、ホグワーツ魔法魔術学校の講師であるスネイプ先生（男性）の言葉づかいを見ていく。以下の文は、初回の魔法薬の授業でハリーたちに向けて話した内容である。

“As there is little foolish wand-waving here, many of you will hardly believe this is magic. I don't expect you will really understand the beauty of the softly simmering cauldron with its shimmering fumes, the delicate power of liquids that creep through human veins, bewitching the mind, ensnaring the senses... I can teach you how to bottle fame, brew glory, even stopper death — if you aren't as big a bunch of dunderheads as I usually have to teach.” (米国版 p. 137)

「このクラスでは杖を振り回すようなバカげたことはやらん。そこで、これでも魔法かと思

う諸君が多いかもしれん。フツフツと沸く大釜、ユラユラと立ち昇る湯気、人の血管の中を這い巡る液体の繊細な力、心を惑わせ、感覚を狂わせる魔力……諸君がこの見事さを真に理解するとは期待しておらん。我輩が教えるのは、名声を瓶詰めにし、栄光を醸造し、死にさえふたをする方法である—ただし、我輩がこれまでに教えてきたウスノロたちより諸君がまだましであればの話だが」(日本語版 p. 203)

スネイプの1人称「I」は、「我輩」である。「我輩」は、かなり知的なイメージをもつ男性が使用する傾向がある。知識や情報、権力がある男性が使用していることが多い。また、「諸君」「～たまえ」と一緒に使われることがある。「バカげたことはやらん」の「ん」は、打ち消しの助動詞の意味として「～ない」と同様に使われている。地位や教養のある年配の男性の話しことばとして用いられる。

口調としての特徴は、基本的に「～である」と断定形式で表されているところだ。この場合は、上から目線でものを言い、話し手の強さ、圧力を倍増させ、威厳を加えた話し方になっている。

次に、hogwarts魔法魔術学校の校長であるダンブルドアと、副校長のマクゴナガルの会話を見ていく。以下の文は、孤児となった赤ん坊のハリーを、叔母家族に引き渡す場面である。

"Fancy seeing you here, Professor McGonagall."

He turned to smile at the tabby, but it had gone. Instead he was smiling at a rather severe-looking woman who was wearing square glasses exactly the shape of the markings the cat had around its eyes. She, too, was wearing a cloak, an emerald one. Her black hair was drawn into a tight bun. She looked distinctly ruffled.

"How did you know it was me?" she asked.

"My dear Professor, I've never seen a cat sit so stiffly." (米国版 p. 9-10)

「マクゴナガル先生、こんなところで奇遇じゃのう」

トラ猫の方に顔を向け、ほほえみかけると、猫はすでに消えていた。かわりに、厳格そうな女の人が、あの猫の目の周りにあった縞模様とそっくりの四角いメガネをかけて座っていた。やはりマントを、しかもエメラルド色のを着ている。黒い髪をひつつめて、小さな髷にしている。

「どうして私（わたくし）だとおわかりになりましたの？」

女の人は見破られて動揺していた。

「まあまあ、先生。あんなにカチコチな座り方をする猫なんていやしませんぞ」(日本語版 p. 17-18)

hogwarts魔法魔術学校の校長であるダンブルドアは、かなり年配の男性という設定である。少しお茶目な性格であるが、魔法使いとして偉大な人物であり、ハリーたちに様々な助言をし、導いていく役割を担っている。そのため、作中でも博士語や老人語がかなり用いられている。「～じゃ」は、断定形式である「～だ」「～である」と同じような使い方がされている。また、終助詞としての「～のう」は、老人の言葉づかいとして多用される。

文末表現としての終助詞「～ぞ」は、「～ぜ」「～よ」に比べて聞き手に対して強く働きかける

印象がある。

マクゴナガル先生は、少し年配の女性である。変身術の授業を担当しており、とても厳格で理知的な性格をしている。1人称は「わたくし」で、「わたし」よりも改まった表現を用いている。また、文末に「～の？」と、疑問形式を使うことで問い詰める度合いがやわらかくなる。したがって、一方的な押しつけ表現ではなく、あくまで女性らしい表現として完成されている。

『ハリーポッター』シリーズ（日本語版）では、かなり多くの役割語（男ことば）（女ことば）が使われている。英語の1人称「I」を見ても、第1巻では「わたし」「わたくし」「ぼく」「おれ」「わがはい」「わし」が登場し、話し手によって様々な使い分けがされていることがわかる。

本作を翻訳した松岡佑子は、

活字では声の調子は表現できない。しかし、もともと同時通訳者である私には、本を読みながら登場人物の声や話し方が聞こえてくるのだ。それをなんとか表現したい。そう思った結果が活字の使い分けだった。叫ぶような大声は太い大きい活字、囁くような小声は小さい活字、呪文は不思議な文字、おどろおどろしい蛇の言葉は掠れたような文字。手紙の文字まで使い分けて、ハーマイオニーはきちんとした文字、ハグリットは下手な文字にした。（日本語版 p. 464）

原作の外国語を日本語に訳した作品の方が、翻訳者の想いやこだわりが詰まっていると言えるだろう。松岡は、話し手の性格や特徴によって「ぼく」「僕」の使い分けもしているという。役割語を使うことで、読み手が物語の世界に入りやすくなるという効果が生まれる。

第5章 おわりに

5-1 今後の役割語

物語の中で大きな役割を果たしているのが言葉づかいである。私たちが女らしさ、男らしさの「らしさ」を表現するときに、言葉づかいを重要視することがわかった。男性的な表現は、断定形式や人称を変え、命令や主張、説得を含むことで、しっかりとした強い印象を与えることができる。女性的な表現は、断定形式や人称を変え、命令や押しつけを避けた表現をすることで、優しくやわらかな印象を与えることができる。

しかし、現在の日本で最も男ことば、女ことばを使用しているのは、実在する日本人の男女ではなく、実在しない物語（翻訳）のなかの外国人の男女、または日本人の男女なのである。日本語としての役割語は、性別的な特徴が表れやすいといえる。外国語の翻訳には特に、翻訳者が持っている知識としての女ことばや男ことばが顕著に表れるのだ。日本人女性が使うべきとされている理想的な女ことばは、現実よりも翻訳の中で使われていることになる。そのため、実際には女ことばで話す女性が存在しなくても、私たちは、女ことばという存在を無意識のうちに認識しているのだ。（男ことばに関しても同様である）

金水は、幼少期に刷り込まれた役割語のステレオタイプの概念は、そう簡単に消えるものではないという仮説を立てている。筆者はその仮説に同意する。幼少期に役割語の概念を刷り込まれた子供たちが、成長し大人になって新しい世代の作品に携わることで、また役割語を用いるこ

とになる。社会に役割語の考え方が浸透している以上、役割語がなくなることはないだろうと考える。このサイクルが存在する限り、現実社会には殆ど存在しない言葉づかいである役割語が、子供たちに受け継がれていくのである。したがって、役割語は今後も増え続ける傾向にあると推測する。しかし、役割語は便利な表現技法である反面、頼りすぎてしまうのは良くないことである。物語を作るうえで、人物描写をしっかりとっておかないとわかりにくい文章になってしまうため、注意が必要である。

今回はサンシャイン1、2、3、『はいからさんが通る』第1巻、『ハリーポッター』シリーズの第1巻を採り上げたが、他の教科書や第2巻以降の内容にも、どの程度の役割語が潜んでいるのかは定かではないため、今後の課題としていきたい。また、来年度は中学で扱われる教科書が改訂されるため、役割語がどの程度使われることになるのか楽しみである。

5-2 まとめ

英語の文では、日本語のように語尾や人称を変えるという手法は、ないことがわかった。逆に、日本語は「I」に対して、「わたし」「わたくし」「おれ」「ぼく」「わがはい」「わし」等、様々な使い方ができる。日本語は知れば知るほど奥が深いものと改めて認識できた。

現代の日本では、話し言葉としてはほとんど使われる機会の少ない女ことば（女性語）であるが、話者が女性であることを際立たせるための役割語としては、特に文学作品などで現在も多く使われている。例えば、「楽しみだわ」「綺麗ね」と文末を上昇調にするのは、女ことばの定番である。このような表現は、ドラマや小説の中の女性が使っている言葉づかいである。実際にはこのような言葉づかいの女性はほとんど存在しないが、言葉づかいとしては認知されているという、我々の中に作られたステレオタイプの一つだと言える。これは幼いころから、女ことばをテレビやアニメ、漫画や物語の登場人物の言葉づかいから学んでいるのだと推測できる。

昔から日本語には、男女の違い（性差）があるとされていた。しかし、その違いは現状としては少なくなっているといえるだろう。現代の男女の実際の会話を分析してもわかるとおり、話しことばの中に男女差はほとんどなくなっていると言える。だからこそ、「らしさ」を保つために、話しことばではなく、書きことばの中に役割語が生き続けているのではないだろうか。

男だから男ことばを使い、女だから女ことばを使うという考え方は、今の時代には合わないのかもしれない。女でも男ことばを使うこともある。また、逆の場合も十分にあり得るのだ。男は男らしい男ことばを使い、女は女らしい女ことばを使うというのではなく、それぞれが話す相手や自分自身に合った言葉づかいを、時と場所によって言葉を使い分けるとするのが正しい言い方だろう。また研究を進めるにつれて、女ことばとは、元のルーツを辿ると男ことばから派生したものであることがわかった。近年、女性が男ことばを使用しているのに違和感があるものの、これが「ことば」本来の姿なのかもしれない。

参考文献

- J.K.ROWLING (1999) 『Harry Potter AND THE SORCERER'S STONE』 Scholastic Paperbacks ; Reprint 版
※ 4-2 にて米国版と記載
- J.K.ROWLING (2003) 『ハリー・ポッターと賢者の石 携帯版』 静山社 翻訳、松岡佑子 ※ 4-2 にて日本語版と記載

- 井出祥子（編）（1997）『女性語の世界』日本語学叢書、明治書院。
- 開隆堂編集部『サンシャイン完全準拠教科書ガイド①学習の友』開隆堂出版
- 開隆堂編集部『サンシャイン完全準拠教科書ガイド②学習の友』開隆堂出版
- 開隆堂編集部『サンシャイン完全準拠教科書ガイド③学習の友』開隆堂出版
- 上瀬由美子（2002）『ステレオタイプの社会心理学 偏見の解消に向けて』サイエンス社
- 金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 金水敏（2011）『役割語研究の展開』くろしお出版
- 金水敏（2014）『「役割語」小辞典』研究社
- 佐々木瑞枝（2006）（日本語ジェンダー学会）『日本語とジェンダー』ひつじ書房
- 新里眞男（著者代表）（2012）『SUNSHINE ENGLISH COURSE 1』開隆堂出版
- 新里眞男（著者代表）（2012）『SUNSHINE ENGLISH COURSE 2』開隆堂出版
- 新里眞男（著者代表）（2012）『SUNSHINE ENGLISH COURSE 3』開隆堂出版
- 中村桃子（2013）『翻訳がつくる日本語 ヒロインは「女ことば」を話し続ける』白澤社
- 中村桃子（2010）『ジェンダーで学ぶ言語学』世界思想社
- 中村桃子（2012）『女ことばと日本語』岩波書店
- 任利（2009）『「女ことば」は女が使うのかしら？ ことばにみる性差の様相』ひつじ書房
- 本田和子（1990）『女学生の系譜・彩色される明治』青土社
- 大和和紀（1995）『はいからさんが通る 1』講談社